

論文

教訓を後世に伝承する津波碑の保存整備に関する研究

Preservation and Maintenance of Tsunami Stone Monuments that Bequeath Lessons to Descendants

秋本 悠喜*・桜井 慎一**

Yuki AKIMOTO and Shin-ichi SAKURAI

要旨：2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震津波を契機に、津波の脅威を過去の災害から学び、今後の防災に役立てる取り組みが行われている。先人によって残された津波記念碑のうち、避難の方法などを石に刻んだ「教訓碑」は、地域住民に津波の心構えを伝承するものである。しかし、その教訓が地域住民に伝わっておらず、災害時において機能している場所と機能していない場所があった。本研究では全国の教訓碑を対象とした現地調査により、道路の拡幅工事に伴った移設や、風化で文字が認識できないまま放置されるといった教訓碑の実態を把握することができた。

キーワード：津波碑, 教訓碑, 現地調査, 保存整備

1. はじめに

1.1 研究背景および目的

岩手県宮古市(姉吉地区)では「高き住居は児孫の和楽, 想へ惨禍の大津浪, 此処より下に家を建てるな」と明治29年と昭和8年の2つの三陸地震での津波の教訓が書かれた津波碑が建立されている。2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震津波でも、その教訓によってこの地区の集落の人々は、被害を免れることができた¹⁾。このような先人が残した津波碑は日本の各地に存在し、人々に教訓を伝え、地震津波への注意を促している。

一方、宮城県気仙沼市(内の脇地区)では、52人が犠牲になった。津波碑のことを思い出さずぐに避難した人もいたが、住宅や工場が建ち並んだ

ことで、津波碑は町の片隅の目立たない場所に追いやられ、その存在を知らない人が増えていたことが原因の一つとされている²⁾。

日本の沿岸市町村に現存する津波碑には、碑文の内容によって供養碑, 教訓碑, 津波到達地点碑, 個人墓碑などに分類することができる。その中でも津波が発生した際の避難経路や避難場所, 津波被害を回避できる住宅の建設場所など、後世への教訓が刻まれた「教訓碑」を本研究の対象とする。津波碑の中には文化財として保存されているものも存在するが、教訓碑は先人が後世に役立てるために残したものであり、そのため人々に活用される保存方法が求められる。そこで本研究では、教訓碑の保存整備の現状と市民認知を向上させるための方策を考究することを目的とする。

* 正会員 ジェイアール東日本ビルテック株式会社,

** 正会員 日本大学理工学部海洋建築工学科

1.2 既往研究の整理と本研究の独自性

津波碑について論じた研究のほとんどが碑文の内容を分析したものである。津波碑の建立の経緯や伝承に関する研究としては、昭和三陸津波記念碑を対象とした首藤³⁾や齋藤⁴⁾の研究がある。また、羽鳥⁵⁾は三重県の津波碑の記録から浸水波高の測定値や推定値を示し、目時⁷⁾は明治、昭和三陸地震の津波碑から当時の被災者の災害への捉え方や後世への伝承について読み解いている。北原ら^{8) 9)}は青森県、岩手県、宮城県の明治、昭和三陸地震の津波碑を対象とし、宮城県において東北地方太平洋沖地震津波で流失を免れた津波碑の調査などを行っている。碑文の書き方の特徴について分析した研究は大池ら¹⁰⁾が行っている。

しかしながら、津波碑の保全整備については井若ら¹¹⁾が徳島県を対象としたものだけにとどまっており、日本全国の現存する教訓碑を対象に現地調査を踏まえて考究しているものは、見当たらない。

2. 研究方法

本研究では、日本全国の教訓碑を調査対象とする。しかし、教訓碑のみを網羅的に整理した文献や資料はない。そのため、教訓碑を含めたすべての種類の津波碑について、「碑文に刻まれた内容」および「建立場所の概略」が記載された文献や資料等を探した。その結果、津波碑に関する既往文献^{3) ~15)}、インターネット上で公開されている資料^{16) ~18)}、国土交通省東北地方整備局道路部による「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」¹⁹⁾、および立命館大学歴史都市防災研究センター作成の「宮城県津波碑分布図」²⁰⁾を収集でき、これらに掲載された合計579基の津波碑を調査対象の候補とした。

この579基の津波碑それぞれについて、そこに刻まれた碑文の内容を吟味し、それが後世の人々

に対する教訓（避難のしかたや心構えなど）が記述されているもの142基を選定した。さらに、地図やカーナビゲーション等を使って石碑までたどり着くことができるよう、建立場所の概略を示す位置情報が得られるものを抽出した結果、調査対象となる教訓碑として125基を得た。

2013年3月から2014年3月の期間、青森県、岩手県、宮城県、三重県、和歌山県、大阪府、徳島県、高知県、熊本県の9府県において上記125基を対象とした現地調査を行った。調査内容は、主に次の4項目である。①教訓碑の建立状態、②建立場所とその視認性、③碑文の判読性、④読み手への配慮の有無。

3. 結果および考察

3.1 教訓碑の建立状態

現地調査の結果、調査対象とした125基のうち7基は発見することができず、118基の存在を確認した。この118基のうち岩手県、宮城県にあった12基は東北地方太平洋沖地震津波により倒壊したままの状態で見つけた。なお、現地調査における教訓碑の建立状態と教訓内容を表-1、各県の教訓碑の分布状況を図-1に示す。

3.2 建立場所における視認性の相違

建立場所が確認できた118基(100%)の教訓碑を分類した結果を表-2に示す。

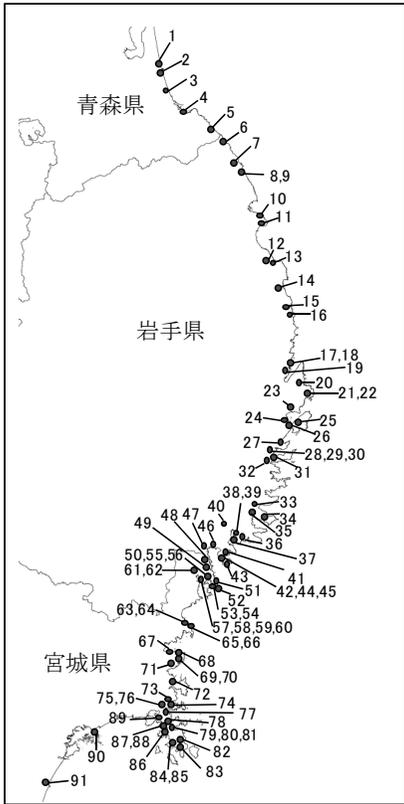
「類型Ⅰ：道路際」は、46基(39.0%)と最も多いが、そのうち、人目に触れにくい「居住地域外」に建立されたものを14基把握した(写真-1)。このような教訓碑は人々から忘れ去られてしまう恐れがあるものの一つである。また、人目に触れやすい「居住地域内」において、教訓碑の前面に地震津波とは関係のない看板を設置し、視認性を阻害しているものもあった(写真-2)。

次に多かったのが、「類型Ⅱ：社寺敷地内」で

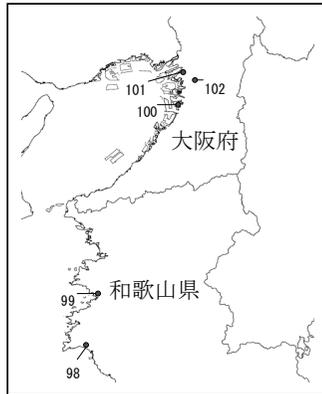
表 1 教訓碑の建立状態および教訓内容

No.	状態	教訓	No.	状態	教訓	No.	状態	教訓
1	○	地震海鳴りほら津浪	43	○	地震があったら津浪の用心, それ津浪機敏に高所へ (計4項目)	85	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ, 危険区域内に住居するな
2	○	地震海鳴りほら津浪	44	○	地震があったら津浪の用心, それ津浪機敏に高所へ (計4項目)	86	○	地震があったら津浪の用心, 忘るな火じ元の注意 (計3項目)
3	○	地震海鳴りほら津浪	45	○	地震があったら津浪の用心, それ津浪機敏に高所へ (計4項目)	87	○	地震があったら津浪の用心, それや来た逃げようこの場所へ
4	○	地震海鳴りほら津浪	46	×	不意の地震に不断の覚悟, 大津浪強い地震の後に来る (計5項目)	88	△	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ, 危険区域内に住居するな
5	○	地震海鳴りほら津浪	47	△	不時の津浪に不断の用心, 地震の後潮が退いたら警鐘を打て, 津浪来たなら直ぐ逃げろ (計5項目)	89	○	地震があったら津浪の用心, 忘るな火じ元の注意, 先に老幼避けて避難第一
6	○	不慮の津浪に不断の注意	48	△	地震があったら津浪の用心	90	○	これより下は危険
7	○	地震に氣を察め津浪に避難	49	○	地震があったら津浪の用心	91	△	地震があったら津浪の用心
8	○	津浪注意, 地震長きは津浪と思へ	50	○	地震があったら津浪の用心	92	○	地震の後は津波が来る
9	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たなら高いところへ (計3項目)	51	○	地震があったら津浪の用心	93	○	地震の時は火を消し直ちに老人と子供をつれて高い丘に避難しろ
10	○	強い地震は津浪の報せ	52	○	地震があったら津浪の用心	94	○	火を消すこと, 財宝は持たない, 老人と子供をつれていく (計7項目)
11	○	強い地震は津浪の報せ	53	○	地震があったら津浪の用心	95	○	火事津波に氣を付けろ
12	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	54	○	地震があったら津浪の用心	96	○	異変があれば寺へ逃げろ
13	○	大地震の後は津波が来る, 津波に追はれたら何處へ (計5項目)	55	○	地震があったら津浪の用心	97	○	大地震の時は先づ海に耳目を向けて下さい, くれぐれも
14	○	ジシガシタラバコダツラヌルナ, ジシガアツタラタカイトコロニアツマレ (計5項目)	56	○	地震があったら津浪の用心	98	○	大地震の時は必ず津波が起こると心得る, 浜中の人は松原の小高き所へ集まるとどまれ (計3項目)
15	○	大地震の後は津波が来る, 津波に追はれたら何處でも此の位の高い所へ逃げる (計5項目)	57	○	大地震とんと沖鳴りそら津浪	99	○	この深専寺の門前を通って東へと向かい天神山の方へ逃げろ (計4項目)
16	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計4項目)	58	○	大地震それ来るぞ大津浪	100	○	強い地震の時は川船に避難してはいけない, 地震が強いときは津波があると知っておくこと
17	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	59	△	大地震とんと沖鳴りそら津浪	101	○	後世に残すため碑文の墨を入れること (計6項目)
18	○	潮汐が異常に退いたら津波が来るから早く高い所へ避難せよ	60	○	大地震それ来るぞ大津浪	102	○	津波の前兆に気づいたら逃げる
19	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ逃る	61	○	大地震とんと沖鳴りそら津浪	103	○	舟に乗って避難するな, 冷静に火の始末をせよ
20	○	強い地震は津浪の報せ, その後の警戒一時間, 想え惨禍の大地震	62	△	大地震それ来るぞ大津浪	104	○	一刻も早く近くの高い所へ避難することが大切
21	○	高き住居は見流す和楽, 想へ惨禍の大津浪, 此処より下に家を建てるな	63	△	地震があったら津浪の用心, 津浪と聞いたら早く高地へ	105	○	事前に地域で避難体制を十分整えておくことが大切 (計2項目)
22	○	強い地震は津浪の報せ, その後の警戒一時間, 想え惨禍の大地震	64	○	地震があったら津浪の用心, 津浪と聞いたら早く高地へ	106	○	大地震の後は津波が来るので, 油断しないようにと子供に伝えよ
23	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	65	×	地震があったら津浪の用心, つなみと聞いたら早く高地へ	107	○	津波の起きるのは, 震源から40kmより近い場合 (計2項目)
24	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	66	○	地震があったら津浪の用心, つなみときいたら早く高地へ	108	○	大地震の直後津波の襲来に心すべきである
25	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	67	△	地震があったら津浪の用心	109	○	油断をせず避難すること
26	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	68	○	地震があったら津浪の用心	110	○	地震の時は油断をするな
27	○	地震があったら津浪の用心せよ, 津波が来たなら高い所へ逃げよ, 危険地帯に住居するな	69	△	地震があったら津浪の用心	111	○	南海地震津波の最高潮位標識をみよ, それより高い津波もあることに注意せよ (計10項目)
28	×	地震があったら津波の用心せよ, 異常な引き潮は津波と思え (計4項目)	70	○	地震があったら津浪の用心	112	○	宝物を取りに戻ってはいけない
29	△	大地震の後は津波が来る	71	○	地震があったら津浪の用心	113	○	昔話と思って油断をするな
30	○	大地震の後は津波が来る	72	○	地震があったら津浪の用心	114	○	大地震の後は津波がくるので注意するように
31	○	大地震の後は津波が来る	73	△	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	115	○	地震のときは油断をするな
32	○	大地震の後は津波が来る	74	×	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	116	○	山の方へ逃げろ
33	○	大地震の後は津波が来る, 俄に潮が引いたら警鐘を打て (計4項目)	75	×	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	117	○	欲を捨てろ
34	○	地震は津浪お警報と心得よ, 直ちに近くの高地へ逃げ (計3項目)	76	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	118	○	地震のときは油断をするな
35	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら高い所へ集まれ (計5項目)	77	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	119	○	地震の直後は火の始末をし, 津波のときは津波がくるときは船を10丁ばかり沖へ, 150年まで用心をしろ
36	○	地震があったら津浪の用心	78	○	大地震の後は津波が来る, 地震があったら津浪の用心	120	○	津波がくるときは船を10丁ばかり沖へ, 150年まで用心をしろ
37	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たら高い所へ	79	△	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ (計3項目)	121	○	天災は忘れた頃にやってくる
38	×	地震があったら津浪の用心	80	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ (計3項目)	122	○	鈴波は津波の兆しだ, 100年余り後に来る
39	×	地震があったら津浪の用心, 津波があったら高い所へ	81	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ (計3項目)	123	○	大潮のときは用心しろ
40	○	想起せ昭和八年三月三日, 大地震の後は津波に注意せよ (計5項目)	82	○	地震があったら津浪の用心, それや来た逃げようこの場所へ	124	○	火を消すこと
41	○	地震があったら津浪の用心, それ津浪機敏に高所へ (計4項目)	83	○	地震があったら津浪の用心, それや来た逃げようこの場所へ	125	○	後世に同じような津波が襲ったときはすべてに優先し高齢者や幼児を連れて直ちに避難しなければならない, 迷わないように普段から逃げ道を確認しておくべきだ
42	○	地震があったら津浪の用心, それ津浪機敏に高所へ (計4項目)	84	○	地震があったら津浪の用心, 津波が来たらこれより高い所へ (計3項目)			

(注) ○…存在を確認できたもの △…倒壊していたが存在を確認できたもの ×…存在を確認できなかったもの
 教訓内容は一部省略して記載している。また, () 内は書かれている教訓内容の数。



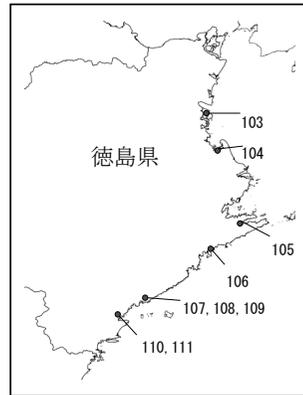
青森県・岩手県・宮城県の分布図



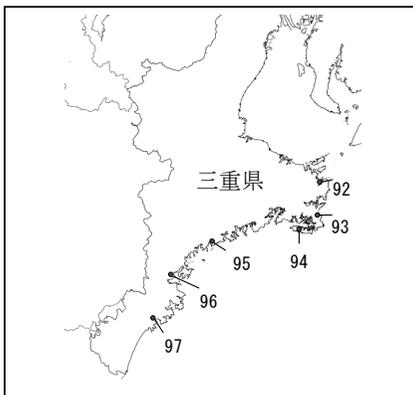
和歌山県・大阪府の分布図



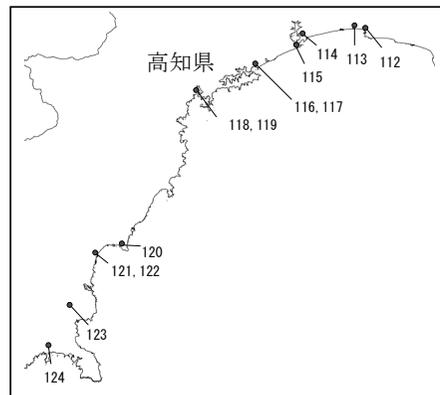
熊本県の分布図



徳島県の分布図



三重県の分布図



高知県の分布図

図－1 各県の教訓碑の分布図

36基(30.5%)建立されていた。中でも「境内」が17基あり、敷地の形によって、人目につきやすい場所と境内の中に入らないと見ることができない場所があった。それに対し、「入口」や「周辺」の中には、比較的視認性の高いものも存在した。写真-3は、社寺の「入口」に建立されており、地震があったら高所にある境内の方へ逃げるように避難を促す指示が書かれた石碑である。これは、安全な避難のしかたを具体的に伝承する教訓碑の好例といえる。

「類型Ⅲ：公園」(写真-4)の6基(5.0%)、「類型Ⅳ：自治体施設敷地内」(写真-5)の5基(4.2%)は、人々が集まる場所に建立されている。また、観光客などが訪れる「類型Ⅷ：景勝地」の浄土ヶ浜には、2基(1.7%)の教訓碑が存在する(写真-6)。地元民だけでなく、来訪者にも津波の教訓を伝える場所となっている。

東北地方太平洋沖地震津波の被害にあった岩手県、宮城県では「類型Ⅴ：漁港施設敷地内」に5基(4.2%)の教訓碑が建立されている。この5か所の漁港施設も被害を受け、津波碑が倒壊している所もあった(写真-7)。漁港施設は、津波被害を受けやすい場所であるが、海で働く漁業従事者に対し、教訓を伝える場所として重視されており、修復して建立されていた(写真-8)。

「類型Ⅵ：個人宅敷地内」では、5基(4.2%)の教訓碑を確認した。「家の脇」にある1基は交差点に面する人目に触れやすい場所(写真-9)に建立されているが、他の4つの教訓碑は人目に触れにくい敷地の奥まった場所にあった(写真-10)。

学校、公民館などの「類型Ⅶ：教育施設敷地内」には、4基(3.4%)建立されている。教訓碑は、子供たちの防災教育の材料となり、後世に伝える教育の場として、最適場所の1つである。これを活かすためにも「校庭隅」(写真-11)のように目立たない場所ではなく、より目立つ「入口」に

表-2 建立場所の分類

類型	建立場所	該当数/総数	詳細場所	該当数/総数
I	道路際	39.0% (46/118)	居住地域内	27.1%(32/118)
			居住地域外	11.9%(14/118)
II	社寺	30.5% (36/118)	境内	14.4%(17/118)
			入口	7.6%(9/118)
			周辺	7.6%(9/118)
			共同墓地	0.8%(1/118)
III	公園	5.0% (6/118)	敷地内	3.4%(4/118)
			入口・出口	1.7%(2/118)
IV	自治体施設	4.2% (5/118)	入口	2.5%(3/118)
			建物横	0.8%(1/118)
			広場	0.8%(1/118)
V	漁港施設	4.2% (5/118)	船着き場	2.5%(3/118)
			組合	0.8%(1/118)
			センター前	0.8%(1/118)
			施設横	0.8%(1/118)
VI	個人宅	4.2% (5/118)	家の脇	1.7%(2/118)
			駐車場	0.8%(1/118)
			裏山	0.8%(1/118)
			倉庫・横	0.8%(1/118)
			入口付近	0.8%(1/118)
VII	教育施設	3.4% (4/118)	校庭隅	0.8%(1/118)
			建物横	0.8%(1/118)
			建物横	0.8%(1/118)
			タワー下	0.8%(1/118)
VIII	景勝地	1.7% (2/118)		
IX	その他	6.8% (8/118)	堤防裏の空き地	0.8%(1/118)
			ポンプ小屋	0.8%(1/118)
			仮設住居	0.8%(1/118)
			高架下	0.8%(1/118)
			高台	0.8%(1/118)
			観音堂	0.8%(1/118)
			公共施設跡地	0.8%(1/118)
			地藏堂	0.8%(1/118)



写真-1 人通りの少ない居住地域外に建立されている教訓碑



写真-2 教訓碑の目の前を塞ぐ消火栓の看板



写真-3 高所避難を促す避難階段に建立されている教訓碑



写真-4 公園に建立されている教訓碑

建立すべきである（写真-12）。

そして、「類型IX：その他」の8基の中で、公共施設跡地では、現在、石碑の展示スペースとして活用され、津波とは関係のない石碑とともにNo. 88の教訓碑が建立されていた。

3.3 建立場所の移設問題

津波碑の中には町の再整備に伴う工事によって移設されてしまったものもある。No. 52の教訓碑（写真-13）は、当初は東北地方太平洋沖地震津波で浸水した場所に建立されており（写真-14）、生徒の通学時や町民も日常生活の中で見ることができた。しかし、道路の拡幅工事によって、現在は約5キロメートルも離れた津波災害の資料を集めたビジターセンターに移設されている（図-2）。ビジターセンターに移設され、資料の1つとしての意味あいもあるが、町民からは被害があった元の建立場所に戻してほしいという声があった。またNo. 61の教訓碑は、当初は道路際にあったものが、個人宅の敷地内に移設された事例である。

3.4 碑文の判読性や認知性

確認できた118基のうち、倒壊していない106基（100%）を対象とし、碑文の文字が読める状態にあるかといった判読性と、教訓碑の存在が人々に気付かれやすいかといった認知性を阻害している要因について分類した。結果を表-3に示す。なお、1つの碑文に判読性・認知性を阻害する要



写真-7 漁港施設敷地内で倒壊している教訓碑



写真-8 漁港施設敷地内で修復された教訓碑



写真-9 視界の開けた個人宅敷地内にある教訓碑



写真-10 裏山に建立されている視認性の悪い教訓碑



写真-11 小学校の校庭隅に建立された教訓碑



写真-12 小学校の校門に建立されている教訓碑



写真-5 自治体施設の入口に建立されている教訓碑



写真-6 景勝地（浄土ヶ浜）に建立されている教訓碑

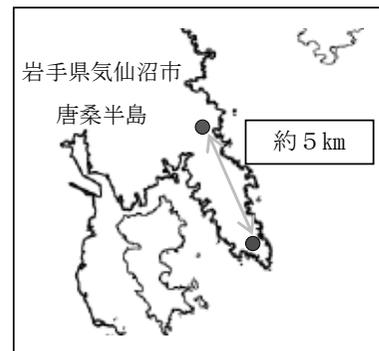


図-2 移設されたNo. 52の教訓碑
赤丸：現在の建立場所 青丸：移設前の建立場所

因が複数ある場合は重複集計をしている。

「類型G:問題なく読める」ものは39基(36.8%)あり、反対に碑文の判読性が損なわれているものが67基(63.2%)と多かった。

判読性を阻害する要因として「類型A:汚れ・風化により読みにくい」が43基(40.6%)と最も多く、長い歳月が経過したことにより保存状態が悪化している例がみられた(写真-15)。

また、碑銘と比較して「類型C:教訓部分の文字が小さい」(写真-16)が12基(11.3%)あった。津波碑の碑銘の文字は大きいですが、最も重要な教訓が書かれた文字が小さく、風化すれば重要な碑文が読みにくくなってしまふ恐れがある。

「類型B:字体が古く読みにくい」(写真-17)の30基(28.3%)は現代人が碑文を読むには困難であり、「類型D:教訓碑前の読むスペースが狭い」(写真-18)の14基(13.2%)や「類型E:石碑の一部が隠れている」(写真-19)の6基(5.7%)は、読み手への配慮を欠いている

表-3 判読性・認知性を阻害する要因の分類

類型	状態	該当数/総数
A	汚れ・風化により読みにくい	40.6%(43/106)
B	字体が古く読みにくい	28.3%(30/106)
C	教訓碑前の読むスペースが狭い	13.2%(14/106)
D	教訓部分の文字が小さい	11.3%(12/106)
E	石碑の一部が隠れている	5.7%(6/106)
F	石碑でないものに碑文が書かれている	3.8%(4/106)
G	問題なく読める	36.8%(39/106)
類型A~Gのうち、1つでも当てはまるもの		63.2%(67/106)

表-4 判読性の回復手段の分類

類型	手段	該当数/総数
a	説明板	16.0%(17/106)
b	墨入れ	4.7%(5/106)
c	再建	2.8%(3/106)
d	パンフレット	1.9%(2/106)
e	なし	79.2%(84/106)

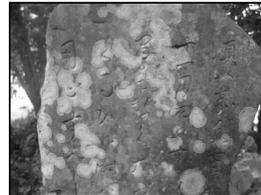


写真-17 文字が古く判読するのが難しい



写真-18 碑文を読むスペースがない読み手への配慮の欠如



写真-13 移設され教育施設敷地内にあるNo.52の教訓碑



写真-14 No.52の教訓碑の本来の建立場所



写真-19 草木により4面中3面の教訓しか見えない



写真-20 No.105の常夜灯の土台に刻まれた教訓碑



写真-15 汚れて碑文が読みにくい



写真-16 右の碑銘に比べ左の教訓の文字が小さい



写真-21 No.114の石碑の橋の柱に刻まれた教訓碑



写真-22 説明書きと現代語訳が書かれた説明板

「類型 f：石碑でないものに碑文が書かれている」教訓碑があり、常夜灯の土台（写真-20）や石橋の柱（写真-21）などに文字が刻まれている。これらの教訓碑は、津波被害にあった場所に元々あったものに教訓が刻まれたもので、記念碑とは違い人々からは気づかれにくい。また、案内板などの設置がされておらず、地域住民でもこの事実を知らない人がいよう。

3.5 碑文の回復手段

倒壊しているものを除く、碑文の内容が判読できた106基（100%）の判読性の回復手段について分類した結果を表-4に示す。

回復手段として多く用いられたのは、「類型 a：説明板の設置」17基（15.7%）であった。説明板を設置することは、石碑を再建するよりも比較的安価で教訓碑自体の視認性や碑文の判読性を高めることができる。事例として、写真-22のように現代語訳が書かれた説明板が望ましく、現代の人々に分かりやすく伝えることが重要である。

次に、「類型 b：墨入れ」されているものが5基（4.6%）ある。大阪府にある大地震両川口津浪記石碑（写真-23）の碑文には、「年々文字よミ安きやう墨を入れ給ふへし」と書かれており、毎年「墨入れ」が行われ、後世に継承する行事が続いている。その他にも、白墨を入れて視認性を向上させているものもあった（写真-24）。

「類型 c：再建」されているものは3基（2.8%）で、費用が高くなるため決して多くはないが、旧碑の横に新しい石碑を建立されている場所（写真-25）では、先人に対する感謝の意や津波の脅威に関する意識の高さがうかがえる。しかし、旧碑を壊れたために再建を行った場所（写真-26）では、壊れた旧碑を放置している所もあった。後世に残し伝えるため、修繕を行い、一緒に保存することが望まれる（写真-27）。



写真-23 No. 101の墨入れされている大地震両川口津浪記石碑



写真-24 白墨で墨入れされているNo. 71の教訓碑



写真-25 左の教訓碑（No. 90）の横に新たな石碑が建てられた



写真-26 再建された碑の横に倒壊した旧碑が放置されている



写真-27 上部が壊れているが建立されているNo. 88の教訓碑



写真-28 説明板の右下にパンフレットが入っている箱を設置



写真-29 覆堂を設置したNo. 99の教訓碑

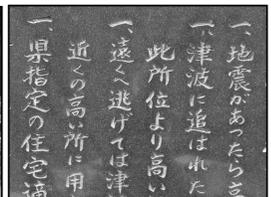


写真-30 具体的な場所を示している教訓



写真-31 吉祥院のNo. 96の教訓碑



写真-32 教訓が裏面にあり読むことが困難

来訪者などにも津波の教訓を伝えているため「類型d:パンフレット」(写真-28)が置かれている所もあった。内容としては、碑文と現代語訳が書かれているものや、市街地の観光マップを併記しているものもあった。

また、現地調査の中でNo.99の教訓碑ように覆堂(写真-29)を設置することで雨風による劣化を事前に防ぐ対策が行われていた。屋外に建立されている教訓碑ではあるが、このような対策により判読性を損なう要因を軽減することができる。

3.6 教訓内容

教訓内容について津波到達地点(浸水線)などの関連性を踏まえて考察を行う(表-5)。

今回確認した教訓碑の中で「これより」、「此の位の」などと具体的な場所を示し(写真-30)、建立場所に意味を持たせているものを17基(16.0%)確認した。東北地方太平洋沖地震津波の被害にあった岩手県では、これらの教訓碑のある地点まで津波は到達しなかった。No.23の教訓碑も高台にあったため被害はなかった。

これに対し、宮城県の教訓碑は浸水線内のものが多く、被害にあっているものが多かった。これには建立された際の方針の違いが関係していることが考えられる。岩手県では「津浪浸水線上の適当な箇所」²¹⁾、宮城県では「記念するに最も適当な場所」²²⁾としているためである。

No.96の教訓碑(写真-31)は吉祥院という寺院内に建立されているが、この寺は浸水線外に位置しハザードマップ上においても避難場所に指定されている。No.99の教訓碑は深専寺の門前に建立されており浸水線内に位置する。碑文には「深専寺門前を東へ通り天神山へ立のくべし」と門から徒歩で約7分の場所に、避難場所に指定された天神山があり、門から東へ向かうほど浸水線外に逃れることができるなど、現在でも有用な行動指

表-5 建立場所に意味を持つ教訓碑

No.	碑銘	場所を示す碑文	浸水線	
			対象地震	ハザードマップ ²⁰⁾
岩手県				
12	大海嘯記念	此所位の	線外	線外
13	津波記念塔	此処位の	線上	線外
15	三陸大海嘯記念	此の位の	線外	線外
16	三陸大海嘯記念	比の位の	線外	線外
21	大津浪記念碑	此処より	線外	線外
23	大海嘯記念	比の位の	線内	線内
25	大海嘯記念	此所位の	線上	線外
26	大海嘯記念	此所位の	線外	線外
35	津浪記念碑	此所位の	線外	線上
宮城県				
80	大震嘯記念	これより	不明	線内
81	大震嘯災記念	これより	不明	線内
84	大震嘯記念	これより	不明	線内
85	大震嘯記念	これより	不明	線内
87	大震災記念	この	不明	線外
90	貞観の碑	これより	不明	線外
三重県				
96	安政津波碑	寺へ	不明	線外
和歌山県				
99	大地震津波心得之記碑	天神山へ	不明	線内
計	16.0%(17/106)			

(注)岩手県,宮城県は東北地方太平洋沖地震の浸水線

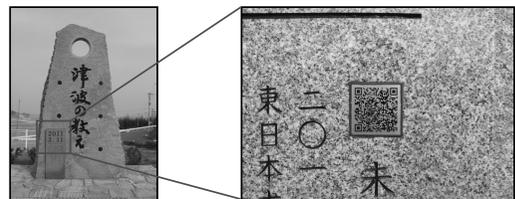


写真-33 宮城県気仙沼市の小泉小学校に建てられた津波記憶石2号,QRコードを読み取ることによって被災時の映像を観ることができる

針が残されている。

3.7 新たな津波碑の評価

東北地方太平洋沖地震津波の後、新たな津波碑が造られている。青森県階上町にある大蛇小学校では「ほら逃げろ津波の時は線路まで」と書かれた津波碑が建てられた。しかし、建立場所は校舎から最も離れたグランド隅であり、津波碑は教訓の碑文側が正面に向いておらず、周囲は草木により囲まれて読むことが難しい(写真-32)。

宮城県気仙沼市にある小泉小学校の津波碑には、ステンレス製のQRコードが取り付けられており、誰もがその場所で被災状況の映像などを見ることが



写真-34 新たな津波碑 (岩手県宮古市重茂)



写真-35 新たな津波碑 (岩手県宮古市重茂)



写真-38 新たな津波碑 (岩手県久慈市宇部町)



写真-39 新たな津波碑 (宮城県気仙沼市唐桑町)



写真-36 新たな津波碑 (岩手県宮古市重茂)



写真-37 新たな津波碑 (岩手県宮古市重茂)



写真-40 新たな津波碑 (宮城県南三陸町歌津)



写真-41 新たな津波碑 (宮城県石巻市雄勝町)

できる (写真-33)。貴重な映像資料を見せて後世に伝えることは有効な手段であるが、津波碑自体の大きさに比べて碑文の文字が小さいといった問題点が見られる。

新たに造られた津波碑は、今はきれいで碑文が読みやすい。しかし、石碑は風化するものであるため、碑文は短文にまとめ文字を大きく残したり、年月が経っても風化しにくい石材を選んだりすることが推奨される。また、新しい津波到達地点碑 (写真-34~41) なども見られたがほとんどのものが小さかった。大きな文字を彫るためには石の大きさにも考慮が必要である。

4. まとめ

建立から長い年月を経た教訓碑の中には、建立場所の視認性や判読性が損なわれるなど、世間から忘れられた存在になってしまう問題を確認することができた。また、現地調査では、津波碑の他に太平洋戦争などの慰霊、顕彰碑などの板碑が多数あるため見分けがつきにくい問題もあった。

既存の古い石碑の中には、硬度の低い地元産石材を用いざるを得なかったり、手彫りしやすい堅さの石材を選んだりしたために風化が進んだものもある。機械彫りが普及し、世界中から様々な石を調達できる現在、費用と効果に見合った教訓碑に相応しい石材の選定も重要となる。

今後、風化が進んだ古い教訓碑を防災教育の教材として活用していくためには、現代語訳に書かれた説明板の設置など、早急な対策が必要である。先人が残してくれた教訓碑という貴重な遺産を無駄にせず、津波への教訓が日常生活を通じて多くの人々に伝承されていくことが望まれる。

5. 謝辞

本研究の一部は、日本大学理工学部における「東日本大震災復興プロジェクト」によるものであり、ここに感謝の意を表す。

引用・参考文献

- 1) 読売新聞：先人の石碑 集落を救う, 2011. 3. 30. 朝刊
- 2) 読売新聞：[記者ノート] 震災伝え続ける大切さ, 2011. 12. 27. 朝刊
- 3) 首藤伸夫：昭和三陸津波記念碑 建立の経緯と防災上の義務, 津波工学研究報告第 18 号, pp. 73-84, 2001
- 4) 齋藤平：津波記念碑の伝承, 皇学館大学文学部紀要, Vol. 46, pp. 78-91, 2008. 3
- 5) 羽鳥徳太郎：三重県沿岸における宝永・安政東海地震の津波調査, 地震研究所彙報, Vol. 53, pp. 1191-1225, 1978. 8. 15
- 6) 羽鳥徳太郎：高知県南西部の宝永・安政南海道津浪の調査—久礼・入野・土佐清水の津波の高さ—, 地震研究所彙報, Vol. 56, pp. 547-570, 1981
- 7) 目時和哉：石に刻まれた明治 29 年・昭和 8 年の三陸沖地震津波, 岩手県立博物館研究報告第 30 号, pp. 33-45, 2013. 3
- 8) 北原糸子：東北三県における津波碑, 津波工学研究報告第 18 号, pp. 85-92, 2001
- 9) 北原糸子, 卯花政孝, 大邑潤三：津波碑は生き続けているか, 災害復興研究 4 号, pp. 25-42, 2012
- 10) 大池茂樹, 齋藤平：津波記念碑の書法及び受容意識に関する調査研究, 皇学館大学文学部紀要, Vol. 43, pp. 27-43, 2005. 3
- 11) 井若和久, 上月康則, 山中亮一, 田邊晋, 村上仁士：徳島県における地震・津波碑の価値と活用について, 土木学会論文集 B2 (海岸工学), Vol. 67, No. 2, pp. I_1261-I_1265, 2011
- 12) 行谷佑一, 都司嘉宣：宝永 (1707)・安政東海 (1854) 地震津波の三重県における詳細津波浸水高分布, 歴史地震第 20 号, pp. 33-56, 2005. 3. 17
- 13) 長尾武：大阪・四天王寺 安政南海地震津波碑文の判読, 歴史地震第 27 号, pp. 77-84, 2012
- 14) 昭文社：東日本大震災復興支援地図, 2011. 6
- 15) 毎日新聞高知局：歴史探訪 南海地震の碑を訪ねて 石碑・古文書に残る津波の恐怖, 2011. 11
- 16) 徳島大学環境防災センター：南海地震を知る 徳島県の地震・津波碑,
URL:http://www.jishin.go.jp/main/bosai/kyoiku-shien/13tokushima/material/tksm_22_3.pdf
- 17) 和歌山県立博物館：石に刻まれた災害の記憶 災害記念碑一覧,
URL:<http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/saigai/jisintunami-list.pdf>
- 18) Kasen.net 津波災害史跡位置図 日本の川と災害, URL:<http://www.kasen.net/ishibumi/tsunami.htm>
- 19) 国道交通省東北地方整備局道路部：津波被害・津波石碑情報アーカイブ
URL:<http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekijijouhou/archive/top.pdf>
- 20) 立命館大学歴史都市防災研究センター：津波被害・津波石碑情報アーカイブ,
URL:http://www.rits-dmuch.jp/jp/project/tsunami_monument.html
- 21) 津波デジタルライブラリー, 岩手県昭和震災誌 (1970 年), 第四編復舊事業, 第九節豫防対策, 五津浪浸水線石標建設
URL:<http://tsunami-dl.jp/document/036#section-a31a9f07ecd1d61221650ebfb711225a>
- 22) 津波デジタルライブラリー, 宮城県昭和震嘯誌 (1935 年), 第五編雑録, 第二章記念事業, 第二節記念碑の建設
URL:<http://tsunami-dl.jp/document/035#section-109351b2f49fb5c9c99d443959edf027>

著者紹介

秋本 悠喜（正会員）

ジェイアール東日本ビルテック株式会社（東京都渋谷区代々木2-2-2JR東日本本社ビル8F），平成元年生まれ，平成27年3月日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻博士前期課程修了，修士（工学），日本建築学会会員

桜井 慎一（正会員）

日本大学教授，理工学部海洋建築工学科（〒274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1），1956年生まれ，1982年日本大学大学院理工学研究科海洋建築工学専攻修士課程修了，工学博士，日本建築学会会員，日本都市計画学会会員，土木学会会員

E-mail : sakurai@ocean.cst.nihon-u.ac.jp

Preservation and Maintenance of Tsunami Stone Monuments that Bequeath Lessons to Descendants

Yuki AKIMOTO and Shin-ichi SAKURAI

ABSTRACT : The *Heisei Sanriku Tsunami* caused by the earthquake off the Pacific coast of Tōhoku on March 11, 2011 has led to efforts to learn more about the horrors of tsunamis in the past in order to avoid the same suffering in the future. The tsunami stone monuments erected by the ancestors, stone monuments with lessons engraved on them telling how to take refuge, contribute by transmitting awareness of tsunamis to local residents. Some monuments in different places fulfill their function when natural disasters occur, while others do not, and local residents have not always abided these lessons. This study, based on fieldwork regarding such lesson stone monuments all over Japan, investigated the actual situation of lesson stone monuments; some of them were moved due to the construction associated with widening roads, and others that remained had weathered faces with letters that had disappeared.

KEYWORDS : Tsunami stone monuments, lesson stone monuments, fieldwork, preservation and maintenance